國土防衛上の見地より する廣重禮讃

長谷川久一

「野球界」主幹故横井春野氏は、その晩年の名著「富士と伊豆の山々」のなかで、富士の紹介については、北齋の方が廣重よりも立ち勝つて居ると述べてゐるが、單り富士に關する限りに於ては恐らくさうかも知れぬが、東海道五十三次全體の風景畫については、十目の見るところ廣重が第一人者たるは蓋し何人も異論のないところであらう。凡そ北齋の風景畫が主として人事に隷屬してゐたのに反し廣重は終始一貫して風景をのみ主題としてゐた點は明かに看取せらるべきである。彼の力作にして今日世に賞美せられる花鳥畫の如きは、畢竟彼として餘技に過ぎないもので、要するに廣重ほど自然を熱愛し、自然に沒頭し盡くした畫家は他には無いと思はれるのである。樣々の難關や色々の試錬にあふたのに拘らず、遂に今日によく傳はつて東海道の風景畫と云へば、直ちに廣重と云ふことが頭に浮んで來るのは、廣重が全く自然の讃美者であり、自然に對し飽くまで謙讓で之に忠實を極めたからに他ならぬのである。もとより製作出版の順序は、必ずしも日本橋から逐次手をつけて行つたものではなかつたに違ひない。「五十三次」は天保年代の初め、八朔御馬進獻の御使者上洛の際、隨行のうちに加はつて東海道を往復し、その沿道驛路の風光を深く腦裏に刻んで江戸に持ち歸り、竹之内書肆から開版したのだが、取りたてて奇もなく變哲もない風景の寫生であつたに拘はらず、忽ち巷間大衆の趣味に投合して異常な喝采を博したのであつた。即ち當時の好尚と云へば、或は妓女俳優の錦繪か、または武勇傳・人情本等の挿繪ばかりで、一般大衆の飽滿を來してゐた矢先、そこに何等かの新生面の版畫界に出現せんことを待望してゐた氣運に乘じて斯く成功をかち得た次第なので、全然その頃の時好に適合したから當代浮世繪を一朝にして風靡したといふ盛な進出振りを見せたのであつた。凡そ竹之内保榮堂板の「五十三次」は、數多のシーリーズのうち實に第一着手のものなので、從つて廣重の純眞な心をもつてした細くて親しい、敬虔にして透徹せる自然鑑賞から出た作品で、之によつて彼は天象自然の性格をばいささかもその特異性を誇張せずにむしろ平凡な技巧によつて把握し再現したから、そこに無限の興趣が湧き出て來るのである。而して一一の構圖、彩色、板行の技術も新鮮發溌としてゐて、畫集として見るも全編を通じて、大したむらがなく、溫雅清新の趣味を覺えしめるものがある。勿論之は保榮堂の第一版について云ふべきことであつて、そのあとから出た後刷になるといふと、描線疲れ、發色固く、摺の工合も遲緩したものが多いから、後摺版や改刻版では廣重の眞價をうかがふことは困難であるので、實際保榮堂第一版の線描鮮明、摺刷淡雅なのを擇し、求めなければならぬのである。廣重はその風景畫の版に伊豫柾を用ゐたといふことである。當時版畫は大抵人物が主題であつたが、それらは概ね奉書に摺られたものである。深みのあり過ぎる軟かな奉書を避け、平板にして强靭な伊豫柾を採用したのは、全く廣重獨創の新機軸で、前記の如くに彼が飽くまで自然に忠實ならんとする周到な注意から出發したと謂ふ可きである。（以下次號）

毎號連續記載し居つた「編輯室内外」は筆者が病氣のため本號には記載出來ざるを頗る遺憾とするところである、併乍ら筆者の病狀も日々快方に向つてゐるから必ずや次號からは亦た健筆を揮はるゝことと存ず、玆に讀者諸賢に御詫び旁々御諒承を願つて置く。「一記者」

一ヶ年分 定價一部 金五十錢 金六圓

東京都麹町區霞關一丁目内務省内 社團法人道路改良會 發行所

電話銀座(57)〇四二七 振替口座番號東京一九〇六八

東京都赤坂區氷川町一七 發行者 平井良成

東京都小石川區諏訪町五六 編輯者 一記

印刷所（東京三六）株式會社常磐印刷所

印刷者 奈良直一

日本出版會會員番號二二〇〇五四